



馬場あき子

歌と花

わが心の風景

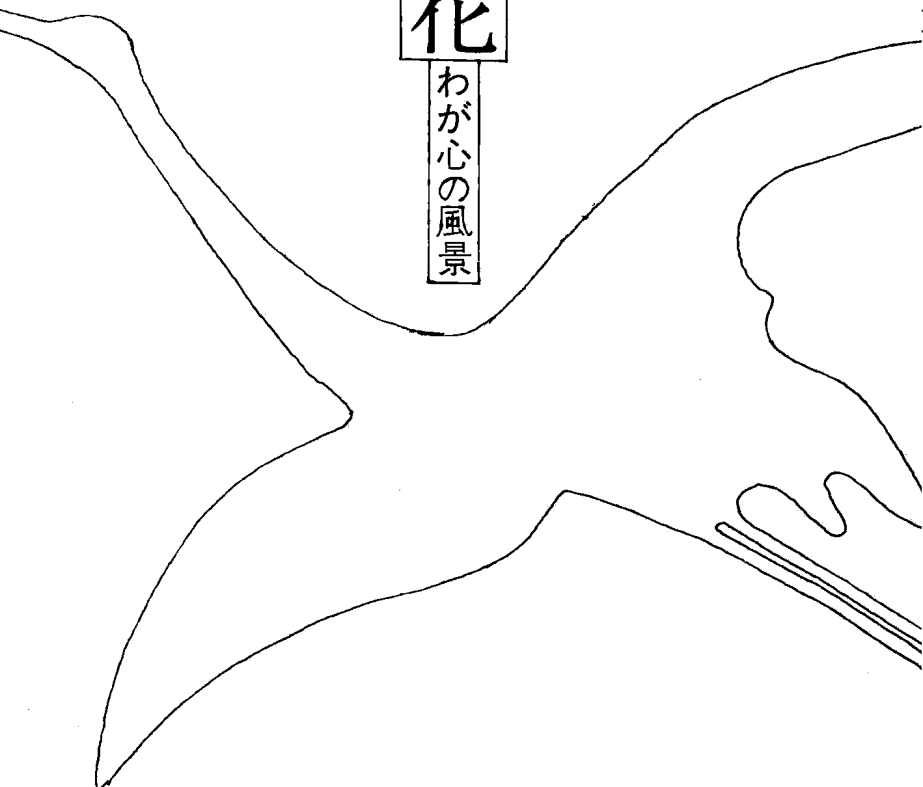
白水社



馬場あき子

歌と花

わが心の風景



著者略歴
 一九二八年東京生
 昭和女子大卒
 現代歌人協会会員
 主要著書
 「飛花抄」「桜花伝承」「鬼の研究」他

歌と花
 わが心の風景

定価 一三〇〇円

一九八三年一月一日印刷
 一九八三年二月二十五日発行

著者 ◎ 馬場 あき子

発行者 高橋 孝

印刷者 田中 昭三

発行所 株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三ノ二四
 電話 営業部 〇三(三六)七八一一
 編集部 〇三(三六)七八二一
 振替東京 九一三三二二八
 郵便番号 一〇一

理想社印刷・加瀬製本

ISBN 4-560-04146-6

歌と花

わが心の風景

装帧
池田和邦

目次

I

女流の自然詠 9

近代女流の自然詠 25

万葉女流の感性 40

音、その気配の韻律 45

みやびを生きた女人たち 50

歌よみの清少納言 58

おんなの鬼 63

卑弥呼幻像 68

II

世阿弥の佐渡 75

田一枚植ゑて立ち去る 81

吉野の桜 86

小夜の中山にて 90

東北、そのけなげな風土から 93

乙女ぞ立てる 96

西行桜 104

〈花〉とさくら 109

朝顔のうた 112

半菰 114

ひとむらずすき 116

くろがしら 122

唐船の幻 125

反復の美 131

III

古く新しき詩語の情念 137

森のふくろう 149

創造の場 154

短歌と朗読 157

歌とことば 159

IV

私と本 183

雑巾文化	187
いじめられっ子	191
変節をききたる耳	194
別れの櫛	199
夏のうた	206
思い出	209
道草の三十代	215
鬼となる日	218
あとがき	220
初出一覧	222

女流の自然詠

日本の詩歌の歴史の中で、四季の変化のこまやかな自然が大きな役割を果していることはいうまでもない。たとえば記紀の歌謡の中でも、八千矛の神（大国主）が越の国の沼河日売を婚（つまと）に行つた時の歌謡なども「嬢（むすめ）子の寝（な）すや板所（いたど）を／押（お）そふらひ 我が立たせれば／引（ひ）こづらひ 我が立たせれば」というような臨場感溢れる場面をおぎなうように、「青山に鵲（うさぎ）は鳴きぬ／さ野（の）つ鳥（と） 雉（きし）は響（とよ）む／庭（に）つ鳥（と） 鶏（けい）は鳴く」という四方遠近の情景が加わることによって、この婚（つまと）の夜明けの場はどれ程引き立ってくることか。

広々とした古代の越の国の、力にみちた大地や空とともにいきづいていた人間の呼吸が、自ら自然と人との親愛深いかかわりについて思わせる。

しかしまた、沼河日売の答えた歌謡に目を移してみると、「萎（な）え草（くさ）の女（め）にしあれば」という形容や、「わが心 浦渚（うらす）の鳥（と）ぞ」という比喩はあるが、自然そのものの描写はなく、自然の部分や情態を比喩的に、切り出して活用し、イメージの増幅をはかる方法が生れている。

こうした歌謡の作者が誰であるかはわからない。しかしどちらかというと、男の歌に取入れられた自然は、よくその中に躍動する人物の表情をものばせ、いきいきとしている。同じ八千矛

の神が、嫡后おきき須勢理毘売すせりひめの嫉妬にくに困こじはて、出雲の本拠を出て行こうとした時の出立の歌謡にしても、「沖つ鳥 胸見る時／羽叩はたたきも これは相応ふさはず／辺つ波 背そに脱ぬき棄うて」などの表現のおもしろさは、身を装った衣裳が似合わないからといって、脱ぎ捨てる形容が、いきいきとした動作を思わせ、比喩的に用いられた自然や鳥の表情が、そっくり人物の表情となりきっているところにある。

こうした歌の伝統は豊饒な歌謡に彩られている倭建の伝承においても同じことがいえる。たとえば尾張の美夜受比売みやすひめとの贈答などでも、「ひさかたの 天の香具山／とかまに さ渡る鶴つる／織ひ細こ 撓ななや腕うでを／枕かむとは 吾はすれども——」というように、自然の大きな視野から小さな視点へと、韻律的、抒情的に、叙すべき的をしぼって漸次高まってゆく。それに対して、美夜受比売の答歌はというと、ほぼ同律で答えるという調和は保ちながらも、叙述体に近く、その抒情性はほとんど韻律に依存している。

すでにあつた歌謡を挿入しつつ物語をふくらませてゆくという物語構成法は最も多く用いられたであろうから、こうした例ばかりをあげて、女人が自然を取りこんで抒情する方法におくれていたとはいえないが、それでもなお記紀歌謡の女の場合は、その視野の広がりにおいて男の場よりもはるかに狭い。

もつとも磐之姫皇后いわのひめのおきき（仁徳皇后）の歌として『日本書紀』が載せる「つぎねふ 山城川を／川のほ浜はり 我が浜れば／川隈に 立ち栄ゆる／百足ももたらず 八十葉やそはの木は 大君ろかも」の一首は、堂々たる大樹の、樹相のみごときをもつてそのまま「大君」の人格をも感受させる効果をみせており

印象深い。ともかく、こうした記紀歌謡時代の原初的な自然と、その把握にみせた言語表現は、われわれの詩歌の出発点において大きな力をもっていたといえる。

万葉時代になってもこの原点は大して変ってはいないが、作者や場についての理解がずっとたしかになるため、女人が自然に対してどのような視点をもっていたかをみてゆくには興味深い作品も少なくない。

女流の自然詠としては持統天皇の香具山の歌が有名だが、その前に近江大津宮で行われた春秋の情趣比べに応じた額田王の判定歌は、いかにも女流らしい自然への接し方がみえておもしろい。額田王が春に注文をつけたのは「山を茂み 入りても取らず 草深み 取りても見ず」という、対象との間にある疎隔感においてであり、秋山の趣に勝判を下したのは「黄葉もみぢをば 取りてそしのふ 青きをば 置きてそ歎く そこし恨めし」というように、誘発される情感があり、接近する自然の表情に感銘が深かったからである。

額田王が「黄葉」を愛するのは、黄葉という変化の現象をみつめつつ、自と「しのふ」心が誘われるからで、黄葉の明るい色に触発され、はるかにひろがってゆく情の動きが「しのふ」という語によってしられる。また黄葉の季節に黄葉せぬ青い葉を「歎く」とうたうとき、そこには、どこかその、時節に遅れてある拙さへの歎きが滲み、秋山の黄葉と黄葉に至らぬ景へ向けて、二様に動く心の動きを自己観照しつつ、「そこし恨めし」と強調しつつ結語してゆくあたりが無類におもしろい。「恨めし」という詠嘆は、ここでは漠とした哀傷感をもっているが、「あはれ」よりは内的な情に執した気分が深い。そして、額田王という女人によって、「しのふ」「歎く」「恨

めし」の三語によって定着させられた秋の情緒は、その後において秋の自然をうたう情緒の基調になつていったといえる。

額田王は黄葉によびさまされる情の動きを、ときに黄葉そのもののもつ情であるかと思わせられるまでに事物に接近してうたっているが、その対象認識の基底には、かつて三輪山に向けて「雲だにも情あらなも」とうたいかけたような激しい情を堪えている一面がみられる。それは今日にわたる女流の自然詠の最も大きな特色であるかもしれない。

春過ぎて夏来るらし白栲の衣乾したり天の香具山

持統天皇

君待つとわが恋ひをればわが屋戸の簾動かし秋の風吹く

額田王

かくしつゝ遊び飲みこそ草木すら春は生ひつつ秋は散りゆく

坂上郎女

これらの歌において、自然はたしかに一つの客観として在り、現象としてある。しかし持統天皇の歌の二句で切れたあとにある空白は、三句以下の初夏の風景に単一でない時間を、春から夏へかけての、山見に過ぎた物思ひの時間の軽からぬ情を感じさせるし、額田王の三句のあとも、短い休止を想定することによって、秋風は複雑な心情の揺れを簾の表情にみせるだろう。また、坂上郎女の二句までの詠嘆も、思想性のある三句以下の自然把握によって独自の人生観をただよわせている。

つまり、これらの歌が抱えている自然は、次のように眺められた自然とは少しちがうものがある。

るといえるだろう。

隠口こもりぐちの泊瀬はせの山は色づきぬ時雨の雨は零りにけらしも
山振やまぶきの咲きたる野辺のつぼ堇この春雨に盛りなりけり

坂上郎女
高田女たかだのおおきみ王

そして『万葉集』の女流には、こういう自然詠は数えるほどしかない。もっともこういう自然詠は『古今集』の〈よみ人しらず〉の作品にかなり近づいており、「霧立ちて雁ぞなくなる片岡の朝の原は紅葉しぬらむ」〔古今集〕秋下〕等の類型化への道をたどる。形は整っているが生動の色に乏しく、すぐれた歌とはいいがたい。いわば万葉の女流はこうした手法、つまり、客体化された自然を的確に把握するという分野では、赤人のような認識の域に迫る秀作を生むことはできなかったようだ。

そして、むしろその特色は、(一)手ざわりのある自然を通して、人やくらしへの情を詠嘆し、(二)あるいは大きな自然の中にある生物と同次元の場から哀歎の情をまじえ、(三)自然の中に紛れつつ存在する魂魄やところをなつかしみ、(四)自らの情のかたちとしての自然をうたい、(五)さらには比喩としてのさまざまな自然の表情を発見してゆくという方面に実力を発揮する。

秋の野のみ草刈り葺ふき宿れりし宇治の京みやこの仮廬かりいほし思ほゆ
神風の伊勢の浜荻折り伏せて旅宿たびねやすらむ荒き浜辺に

額田王
碁壇越ごのだんおちの妻

然とあらぬ五百代小田を刈り乱り田廬に居れば都し思ほゆ

坂上郎女

これらの、自然とかかわりをもつ「手」の記憶が、「刈り葺き」「折り伏せ」「刈り乱り」というように一首の中の自然を身近な感触を通して読者に伝える例は、必ずしも女人においてのみ独自だとは言いがたいが、数え立ててみるとやはり女人の分野であるように思われる。旅という場においての手の実感、田廬に居る折の手の実感を通して知ろうとする自然への親しみは、その手わざの一点に情を繋ぎつつ、一方ではまた自とその視野の限界をみせている。

女人は多くその四囲の自然を、殊更にうたいあらわそうとして見るよりも、物思うゆえに見、見つ物思ったのである。したがってそれは「和歌の浦に潮満ち来れば渦をなみ葦辺をさして鶴鳴き渡る」というような原因結果を結ぶ動画的世界に意欲的にはならず、「田子の浦ゆうち出でて見れば真白にそ不尽の高嶺に雪は降りける」という簡潔な描写に赴くこともなかった。

青旗の木幡の上をかよふとは目には見れども直に逢はぬかも
うつそみの人にあるわれや明日よりは二上山を弟世とわが見む

倭大后
おおくのひめみこ
大伯皇女

ここにあげた二首は、哀傷の歌であるから当然に自然への注目も特殊なものになっているが、青旗を立てたような木幡山の上を、死なんとする身をすでに離れた魂が通い漂っているという感取のし方や、弟の屍が埋められた二上山を弟そのものと思ってみつめて生きよう、という感受の